

いしかわ自然史

95号

発行日
2025年9月25日

能登半島地震により島の半分が大きく崩落した見附島、対岸が見附公園、右手側に鵜飼漁港がある

よみがえる 見附島の森林

珠洲市宝立町の沖合に浮かぶ見附島は、標高約30m、長さ120mほどの海岸段丘上の島です。その形が船に似ていることから「軍艦島」とも呼ばれ、能登を代表する景観として親しまれてきました。しかし、2024年元旦に発生した能登半島地震により、島の基盤である珪藻土でできた岩(飯塚層)が大きく崩れ、島の姿は大きく変わってしまいました。島を覆っていたタブノキやモチノキなどの豊かな森も、枯れ木が目立つ寂しい風景へと変わり、地元の人々からは森の将来を心配する声が上がっていました。

そこで今年9月、私たちはボートで島に渡り、森林の再生状況を調査しました。崩れた斜面には背丈を超える高茎草本が密生しており、その中をかき分けて登ると、平らな段丘面にたどり着きました。そこでは胸高直径70cmを超える大きなタブノキがそびえ、さらにそれより直径は小さいものの、数多くのモチノキが生育していました。これらの木々は枝先の葉を落としながらも、幹から沢山の萌芽枝を伸

石川県立自然史資料館館長 柳井 清治

ばしていました。また、樹冠にはカワウなどの巣が多数見られました。さらに、崩落した斜面には3mを超える大きな岩塊が点在し、その間からはアカメガシワやヌルデ、カラスザンショウなど、陽光を好む若い木々が芽生えていました。

森は一度は地震で破壊されましたが、力強く再生し始めていることが確認できました。見附島の森は、自然の回復力と、災害が生態系に与える影響の両方を私たちに教えてくれます。これからどのように蘇っていくのか、引き続き見守っていきたいと思います。



地震により枝葉をいったん落とし、幹から萌芽したタブノキの巨木

石川県内のコウノトリの巣から見つかった絶滅危惧種アカマダラハナムグリ

石川県立自然史資料館 嶋田 敬介

鳥類は、昆虫に新たな生息地を提供する生態系エンジニアとしての役割を担い、彼らがつくる巣には様々な昆虫（甲虫目、鱗翅目、カメムシ目、ハエ目、ノミ目など）が生息していることが知られています。

アカマダラハナムグリ *Anthracophora rusticola* (コガネムシ科) は、鳥の巣で見つかる昆虫の一つです。成虫の体長は1.5～2 cmで、幼虫は鳥の食べ残しや糞・ペリットなどを食べて育ちます。本種は、ハチクマ、サシバ、アカハラダカ、ミサゴ、ノスリ、クマタカ、オオタカ、トビ、カワウ、ハシボソガラスなどの巣で確認されており、トキの雛の胃内容物から成虫の一部が見つかった例もあります。

かつて(40年以上前)、アカマダラハナムグリは、雑木林やその周辺で比較的普通に見られる甲虫でしたが、近年、個体数が減少していると言われています。現在、本種は、多くの地方自治体のレッドデータブックに絶滅危惧種として掲載されており、石川県では絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。減少の要因は、生息場所を提供する鳥類(例:猛禽類)の減少や、生息環境(例:雑木林)の変化などが挙げられます。

コウノトリ *Ciconia boyciana* の巣もアカマダラハナムグリの生息場所となり、兵庫県豊岡市野上では、コウノトリの自然巣から多数(84個)^{ひなど}の本種の土繭が見つかっています。さらに、同市日撫の自然巣では、本種の成虫・蛹・幼虫・土繭を含む291個体が報告されています。コウノトリの巣は他の鳥と比べて大きく、幼虫に豊富な餌資源を提供できることから、本種にとって最も適した生息地の一つであると考えられます。しかし、兵庫県以外の地域において、コウノトリとアカマダラハナムグリの関係はよくわかっていませんでした。

2022年10月、志賀町のコウノトリの自然巣を調査する機会があり、その際にアカマダラハナムグリが発見されたので、その事例をご紹介します。この巣(重さ84.5kg、幅1.6 m×奥行1.4 m×高さ0.6 m)は、2022年4月上旬に電柱の上につくられ、6月上旬には雛が3羽確認されました。8月下旬までに雛はすべて巣立ち、その後、巣は放棄されました。10月6日(11時頃)、北陸電力株式会社の協力を得て、電柱上の巣をクレーンを使って壊さずに地面に降ろした後、ワンボックスカーに載せて石川県立自然史資料館(金沢市)に運びました。

(協力:志賀町教育委員会および石川県生活環境部自然環境課)。運搬後、巣をブルーシートで覆って置いたのですが、夕方(17時頃)再び確認すると、巣材の枝の上に止まるアカマダラハナムグリの成虫を発見しました(図1)。驚くべきことに、その後次々と成虫が見つかり、11月8日までに計27頭を採集しました。また、巣材の枝には、本種の蛹室と考えられる土繭(羽化済み)が2個付着していました。兵庫県以外で、コウノトリの巣から本種が発見されたのはこれが初めてです。石川県内における本種の過去の記録は、加賀地方(金沢市、小松市、白山市、川北町)だけであり、能登地方(志賀町)からは初めての報告になります。今回の発見により、本種が石川県内に広く分布していることが示唆されました。日本の野生のコウノトリは1970年代に絶滅してしまいましたが、主に兵庫県内の施設で飼育された個体が2005年以降継続的に放鳥されており、現在の野外個体数は約450羽に達しています(2025年5月31日現在)。本研究は、コウノトリの個体数の回復と繁殖地の拡大が、アカマダラハナムグリの個体数と生息地の増加につながる可能性があることを示しています。

このアカマダラハナムグリが発見されたコウノトリの巣は、石川県立自然史資料館の玄関ロビーに展示されています。興味のある方は是非ご覧ください。

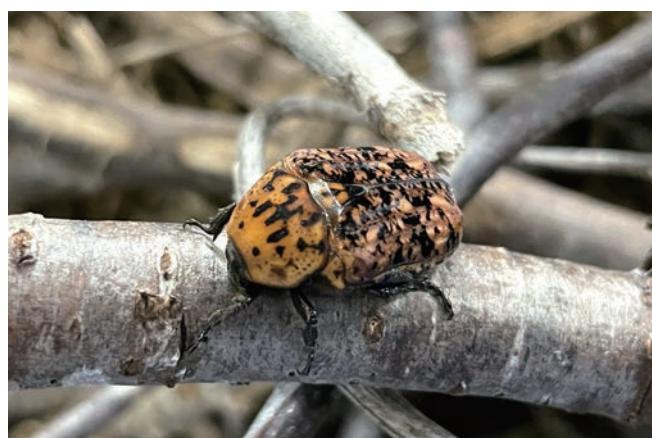


図1 志賀町のコウノトリの巣から見つかったアカマダラハナムグリ
参考文献

Shimada, K. (2023). Discovery of *Anthracophora rusticola* (Coleoptera: Scarabaeidae) in the nest of *Ciconia boyciana* in Ishikawa Prefecture, Japan. *Japanese Journal of Environmental Entomology and Zoology* 34(3): 109-112.

植物の学名を読む

石川県自然史センター顧問 高木 政喜

皆さんは、植物の学名（Scientific name）を読んでいるでしょうか。

調べたい植物を図鑑でそのページを開けると、先ずカタカナで植物名があり、その下に学名が記載されている。しかし、多くの方は、その学名について飛ばして記載文から読み始める人が多いのではないかだろうか。私も学生の頃はそうであった。今から46年前、随分古い話ですが、金沢大学の里見信生先生とある博物館を訪れた際、展示してあった植物の学名を見て「これ間違っているよ」と言っているのを聞いて「はあ、」とし、驚きました。当時から学名について気になっていたので、さすが大学の先生だと思った。また、清水健美先生（金沢大学）からニューヨーク州立大学のカエデ科の先生に山を案内するように言われた時も学名が大変役立ったことが印象につよく残っている。そのような経験から「植物学ラテン語辞典」（豊国秀夫,1987）をもとに自学自習を始めたが、文字をどのように読めばよいのか、分からず、閉口したが、今ではようやく読めるようになり、学名からいろいろ植物について学んでいる。

先ず、学名の文字の読み方から始めよう。

1) 学名の文字の読み方

学名は、ラテン語で表記すると植物命名規約に記されているので、すべてローマ字式に読めば良い。例えれば、イネ科のヨシ：*Phragmites communis*=プラグミテス コンムニスと読む。属名の「h」はサイレンスで読まない。一語ずつ読んでいけば良い。

①母音：

読み方の基本は、母音：a, i, u, e, o → 日本語のアイウエオと同じように読む。

②子音：

各子音は、次のように読む。

c … kと同音で、ceやciはセやシのように発音せず、ケやキのように発音する。

例：Cicero（人名）=キケロー Caesar（皇帝）

=カエサル・植物名：*Celtis sinensis*（エノキ）

=ケルティス シネンシス

f … 英語の発音と全く同じで、日本語にはない発音である。

例：Ferrum（鉄）=フェルム effigies（像）
=エフフィギエース 植物名：*Ficus sarmientos*

（イタビカズラ）=フィクス サルメントス
g … 全部ガギグゲゴ式に読み、ジェ、ジ式にならない。

例：*giganteus*（巨大な）=ギガンテーウス

植物名：*Glycine max*（ツルマメ）=グリキネ マックス

ij … iは、母音の他に子音としても使われる。j m は、英語の j と同じに考えれば良が、j は、ジャ のようにならない。

例：*jam*（すでに）=ヤム *iaspis*（碧玉）=ヤスピス 植物名：*Imerata cylindrica*（チガヤ）=インペラータ キリンドリカ

q … 英語の q と同じだが、この後には必ずuがついていて一緒にクワ、クイ、クウ、クエ、クオのように発音する。

例：*quo*（どこへ）=クーオ *quinque*（五の）=クウ イーンクエ 植物名：*Quercus serrata*（コナラ）=クウエルクス セルラータ

v … 英語の v とちがって、ウ”とは発音しない。

例：*vita*（生命）=ヴィータ *brevis*（短い）=プレ ウィス 植物名：*Viola grypoceras*（タチツボスミレ）=ウイオラ グリポケラス

w … この文字はラテン語にはないが、外国語の固有名詞に由来する学名に使用することは可能で、読み方はその固有の発音による。

植物名：*Wistaria floribunda*（フジ）=ヴィスタ リア フロリブンダ

x … クスと発音する。

例：*nox*（夜）=ノクス *uxor*（妻）=ウクソル 植物名：*Toxicodendron orientale*（ツタウルシ）=トキシコデンドロン オリエンタレ

z … 複数音で、ザ、ズ、ヅのよう発音する。

例：*zona*（帯）=ゾーナ *zizania*（マコモ属）=ジザニア 植物名：*Zanthoxylum ailanthoides*（カラスザンショウ）=ザントキシルム アイ ラントイデス

以上で学名を読むことに主眼を置いて述べたが、これで読めるでしょうか。学名には抵抗のある方もいることでしょう。学名は、世界共通語であること理解して頑張ってみてはいかがでしょうか。

次回は学名の構成について述べみたい。

幸せを呼ぶ青いハチ ブルービー

石川県立金沢泉丘高等学校 吉村 久貴

ナミルリモンハナバチ *Thyreus decorus* は、ミツバチ科の小型のハチ。本州、四国、九州のほか、国外では台湾、中国、朝鮮半島などに分布する。黒い胴体に鮮青色の模様が美しい。色違いのミツバチのイメージで、ブルービー Blue Bee の愛称で親しまれている。暖地では6~10月に見られ、県内では7月~9月に各種の花を訪れる。

幼虫は珍しい生態をしており、コシブトハナバチなどの巣に寄生して育つ。宿主の体から栄養を直接摂るのではなく、宿主が餌として貯えた花粉を横取りする労働寄生(盗み寄生)を行う。産み付けられる卵の数が限られるため、個体数はかなり少ない。出会えた人はラッキーだという意味で、「幸せを呼ぶ青いハチ」とも言われている。



キバナコスモスで吸蜜する個体
2020年9月21日 金沢市別所町

2013年8月下旬、金沢市山川町で吸蜜に来た個体に、初めて出会った。山川町や別所町には、キバナコスモスやハナトラノオが多数咲いている。訪花する夏型のアゲハ類やホウジャク類(蜂雀=日に活動するスズメガのグループ)を撮影中、突然、目の前に現れ、太い口吻で吸蜜をした。



百日草で吸蜜する個体
2022年8月12日 金沢市平町

その後、全く出会えない年もあり、出会えたら幸運と思っていたが、2020年9月には、連日のように、別所町のキバナコスモスに現れた。

2021年8月下旬、加賀地方南部にしか生息しないホシチャバネセセリの撮影を目的として、加賀市中山温泉荒谷町へ。オトコエシで吸蜜するナミルリモンハナバチを見つけた。なかなか姿を見せないが、一度飛来すると、10分間ほど花から花へと移動しながら吸蜜してくれた。吸蜜中にわずかの間、翅をとめる。9月には、日差しの強い所で吸蜜するのに、この日は日陰に長く留まった。



オトコエシで吸蜜する個体
2021年8月29日 加賀市鶴ヶ瀧

早朝にヘクソカズラの花で吸蜜するホシヒメホウジャクを撮影していると、オトコエシには、藍色のオオセイボウが、何度もやって來た。

2022年7月中旬、金沢市平町でミント類や百日草に集まる個体に出会った。小原町では、オミナエシに来た個体を初撮影。2024年8月中旬には、金沢市菅池町の道路沿いのオミナエシに、連日のようなくまなく姿を現してくれた。花の黄色とハチのブルーのコントラストがとても美しい。♂と♀では、腹部末端の青色模様に若干の違いがある。



オミナエシで吸蜜する個体
2024年8月17日 金沢市菅池町

令和6年度 第4回いしかわ自然史探検クラブ報告

邑知潟・七尾西湾の冬鳥観察、能登半島地震による門前黒島漁港の隆起・植生遷移

概要：石川県自然史センター 西岡

登 感想：星稜中学校2年 内田 譲

〔概要〕

第4回は当初2月9日を予定していたが、大雪のため3月9日に延期された。参加しやすい時期であったため、19名の中高生が集った。

邑知潟付近の田では、2月に1,000羽を優に越えていたコハクチョウも北帰行後半の時期となり、300羽程度が残っていた。潟では多くのガンカモ類やチュウヒ、ノスリといった猛禽類を見つけた。



邑知潟に残っていたコハクチョウの群れ

同乗した講師の金山氏（県立大）から鳥類の同定について説明があった。また、酒寄氏（金沢大学）からは邑知地溝帯の成立について地形と合わせて解説してもらった。田鶴浜野鳥観察舎では、七尾西湾に面する眼前の堤防に多くのカモ類が羽を休めており、生態観察をすることができた。



田鶴浜野鳥観察舎からカモ類の生態を観察

12時前に輪島市黒島公民館着。昼食後、地震により4m隆起した黒島漁港の観察に先立ち、①酒寄氏より能登地震の全体像解説、②高木氏（巨樹の会）より隆起により現れた海底からなぜ早々に植生が生じたのか、解説があった。

その後の実地研修では、能登半島地震の実態の一部や植生の不思議さを実感する様子がうかがえた。

〔感想〕

邑知潟での観察、黒島漁港での学習、面白かったです。私は生物も地学も詳しくありませんが、先生方の説明や講義のおかげで楽しく知ることができました。ありがとうございます。

邑知潟では、コハクチョウの群れやカモ類の大群が食事をしたり、飛び立ったりする様子を観察しました。「ケリケリ」と鳴くタゲリも観察しました。邑知潟が逆断層によって生み出された低地で、衛星写真からも森がないのがよく分かって、なるほどと思いました。野鳥にはいろいろな種類があり、棲む環境や飛来時期にも違いがあることが面白かったです。バスでの移動中、ビロードキンクロ（海ガモ）やアオサギを見ました。鳥を見るために双眼鏡を買いたいと思いました。

午後、黒島海岸の隆起に関する講義では、能登半島地震がどのような地震であったのか、断層によって起こった隆起と横ずれについて、活断層の周期についてなど、お話ししていただきました。能登地震の被害が大きくなったのは、複数の活断層が運動して動いたからだという説明に「なるほど」と思いました。どれも知らないことばかりで、今回参加してよかったです。黒島漁港の隆起した海底に植物が生えていることについては、湧水の存在と種の運搬により植生遷移が生じたと聽きました。

海岸での観察では、湧水の状況や地震前の海水面の確認ができました。港だった場所が、水が引いて工事現場のようになっていて驚



隆起した黒島漁港岸壁に付着する二枚貝の死骸跡

きました。自然の力のすごさを改めて感じました。自然の中に入り、自然を肌で感じることは心身にいいなあと感じたので、次回からも参加したいと思いました。

◎参加者は中学1校4名、高校4校15名。生物分野（邑知潟・七尾西湾のコハクチョウ群、ガンカモ類、猛禽類の観察、黒島漁港の植生遷移）、地質分野（邑知地溝帯の成立、能登地震のメカニズム）

第53回いしかわ自然観察会報告

能登の今を見に行こう 復興応援バスツアー

石川 久治

実施日 令和7年6月28日(土)参加者数30名
(講師1、スタッフ1名含む)

震災と水害のボランティアでは何度も被災地に入っていたが、じっくりと被災地の状況を確認する機会が無かったので妻からの誘いもあって今回のツアーに参加した。

金沢駅を8時前に出発したバス車中では石川県立大学の柳井さんより配布資料を基にしてこれから訪れる観察会視察地の説明があり、事前に視察地の被災情報を知ることができて大いに助かりました。



隆起した琴ヶ浜海岸



崩落して碎けた柱状節理

バスが志賀町富来地区に入り、暫くすると機具岩(通称夫婦岩)近くの海辺が左手に見えてきた。隆起した部分が白帯のように見えていた岩場も発災から18ヶ月近くを過ぎると遠目にはその違いが分からなくなっていた。後数年で岩ノリ畑と漁港の痕跡と広がった砂浜以外の隆起した証跡は見た目には分からなくなるのかと思った。

門前町剱地の琴ヶ浜では柱状節理の大崩落箇所のすぐそばまで行き、その凄まじさに恐怖を感じた。麓に人家があったならば大災害間違いないです。

隆起して完全に陸地となった黒島漁港では防波堤の先端まで歩いても新しい波うち際はまだ先であった。国道を車で通りすぎるだけでは

気付かない箇所を知ることができて今回のツアーに参加して良かったと思った。



隆起した黒島漁港

黒瓦の屋根が美しかった黒島集落の家屋にはまだ数多くのブルーシートがかかっていて復旧が進んでいないことがうかがえた。

輪島市市ノ瀬の大地すべりと土石流跡を間近から眺めると改めて自然災害の脅威に圧倒された。能越自動車道輪島道路のルートでもあり、災害対策で難工事となるのではと思った。

震災前の賑やかな情景を思い出しながら、更地となった輪島朝市周辺を歩いた。前途多難であると思うが以前の賑わいを取り戻してほしいものである。

白米千枚田での昼食休憩後に隆起した海岸に作った迂回道路を通って、地震と豪雨の被害が甚大だった町野地区に入ると、街並みには公費解体後の更地が広がっていた。また豪雨の痕跡は護岸として積まれた土嚢袋と田んぼの中に残されたままの流木に見ることができた。

地震と水害の二重災害を克服して「住民のために」と営業を再開している「もとやスーパー」にも立ち寄り、フロア制限で少ない商品の中から能登産品を選んで買い物をした。

能登の復旧復興はまだ取り掛かったばかりで、被災者・被災地へは継続的な支援・応援が必要であることを痛切に感じた一日でした。今回の観察会を計画・運営していただいた関係者各位に感謝いたします。



消失した朝市通り

第36回 通常総会報告

石川県自然史センター理事長 竹上 勉

第36回通常総会が令和7年6月21日(土)、石川県立自然史資料館コミュニケーションホールで午後2時から開催されました。

西岡登副理事長が出席者数の確認を行い、定足数を満たしているので総会は成立となりました。(ただし書面表決用紙に誤記載があったことについては、後日、書面表決提出者に賛否確認を行い、定款27条に基づく書面表決による出席等の正当性を確認しています)

次いで、竹上理事長による挨拶があり、本センターの事業の推進、また事業の一つである石川県より指定管理を請け負っている県立自然史資料館の任務(資料収集、整理、研究さらに教育普及)遂行さらには本センターの課題について会員の理解と協力の依頼がありました。

続いて議長選出が行われ、三谷幹雄氏(石と川の会)が選出されました。

報告1. 一般会務報告

令和6年6月総会から本年6月までの一年間に行われた会議、各種委員会、連絡会、講演会、いしかわ自然史塾、自然観察会等の実施が時系列で報告されました。

報告2. 裁判関連について

中村浩二氏による提訴「地位確認請求」裁判

報告3. 会員数(6月21日現在)

正会員(団体)	29団体
正会員(個人)	100名
賛助会員(団体)	2団体
総計	131

審議題1. 令和6年度の事業報告及び収支決算

1) 調査研究普及事業

①自然史環境調査人材養成プロジェクト講座 「いしかわ自然史塾」

令和6年度は下記の三つの柱の下で事業が進められました。

- 「いしかわ自然史塾」のスキルアップ講座(7回)
- 自然史探検クラブ(中高生対象)(4回)
- 自然観察講座(シニア対象)(2回)

②第34回公開シンポジウムの開催(2025年 3/1)

テーマ:「能登半島地震による自然環境の変貌」—能登半島における自然環境の学術的価値をふまえて地震被害地の復興支援を目指す—

基調講演:「2024年能登地震および奥能登豪雨により発生した大地の変化」

柳井清治(石川県立大学)

話題提供者:荒川裕亮(能登海洋ふれあいセ

ンター)、高木政喜(石川県巨樹の会)、宇都宮大輔(珠洲市自然共生室)

③自然観察会の実施

第51回「手取川扇状地の自然観察と
いしかわ動物園」(6/15)
第52回「南砺市小矢部川周辺
「オーソコツアイト」」(9/28)

2) 自然史系団体交流連携促進事業

第20回活動交流会・研究発表会(12/7)を実施しました。

1. 石川県の植物相研究の現状と石川県地域植物研究会の活動

古池 博(石川県地域植物研究会)

2. 隆起した海底に見られる陸上植物の一考察
高木政喜(石川県巨樹の会)

3. ミカンのおいしさを決定する要因についての研究
菊池由紀乃、久保出千仁、中村麟太郎、
濱浦いろは、堀田比呂(小松高校)

4. 光合成色素の色の変化

中橋香々莉、中川真志、吉田旭輝(星稜高校)

5. 伏見川の生物調査

金沢錦丘高校 伏見川調査チーム

6. 東アジアにおけるイカリモンハンミョウの分子系統および遺伝構造解析

嶋田敬介(石川県立自然史資料館)

3) 博物館指定管理受託事業

石川県立自然史資料館の指定管理事業(企画展、教育普及講座、団体プログラム等)は順調に行われ、入館者数も9,220人と過去最大となりました。

4) 情報交流出版事業

「いしかわ自然史」(92号、93号、94号)の発行、自然史センターホームページの更新を行いました。

審議題2. 令和7年度事業計画及び予算

令和7年度の事業については県立自然史資料館の指定管理事業を始め、例年行っている公開シンポジウム、活動交流会・研究発表会、自然観察会、会報「いしかわ自然史」の発行等を実施していきます。

審議題3. 役員の選任

役員(令和7年度から任期2年間)(理事15名、監事2名)が選任されました。新任理事は坂井恵一(元のと海洋ふれあいセンター課長)、新任監事は北川正司(巨樹の会会長)、川内斉(高校教員)が選任されました。

後日、令和7年度第1回理事会(7/5)において理事長以下役員(竹上勉理事長、上田哲行副理事長、西岡登副理事長、永井三岐子副理事長、柳井清治常務理事)の新体制が決まりました。

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

自然史エッセイ

「金沢市銀河の里キゴ山 星見の日の星空 天文解説を担当して」

金沢星の会 岡本 正樹



5月から10月まで毎週金曜日に金沢市銀河の里キゴ山（以下キゴ山と略称）で行われる星見の日の星空天文解説を担当してきました。パワーポイントで星座や天文情報に関する映像を制作し、大型モニターで表示



解説中の筆者

して、その横で私が解説を加えるというものです。これは私の所属するアマチュア天文家の集まり「金沢星の会」のキゴ山の協力団体としての活動の一環です。

最初は望遠鏡を並

べて、星見の日に来られた参加者の皆さんに星座や天体を観察していただきながら、個々の金沢星の会のメンバーが適時、参加者の皆さんとの動向を見て解説をするという、普通に星空の観望会で行う形式のものでした。しかし、この形の星見の会をしながら、実際の対象物が目の前にあっても、言葉だけでは一般の人にはこちらの思ったことが伝わっていないのではないかという、フラストレーションが私に生まれてきました。いかに言葉を尽くしても、星座は点の集まりにしかすぎず、たとえばアンドロメダ銀河を望遠鏡でのぞいても、ほっとしたタバコの煙でしかない。極端な場合には二重星アルビレオが望遠鏡の視野の真ん中にいるにも関わらず、二重星ってどれ？と聞かれる始末。自分の見ているものが一体何なのか。それがはっきりわからないと見えているのに見えないので。逆に何を見ているのかわかっていてれば、さらに見えてくるものがあるのではないかとも思いました。

そこで解決策として考えついたのが、スクリーンか大型モニターを使って、説明すべきことを、映像を使って表現することでした。しっかり基礎知識を参加者の皆さんに持っていただいて、それから星見の会に臨んでいただく。これが私の目的となりました。

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

その頃までに、金沢星の会の月一回の例会では、これから起きた天文現象や、最近の天文ニュースの情報を伝える仕事を担当しており、パワーポイントでデーターに落とし込んで、発表しておりました。これに若干手を加えて、編集すれば、星見の会を盛り上げることができると考えました。幸いキゴ山の職員の方々も協力的で、早速、大型モニターを用意していただき、自分の思いを実現することができました。当日の星座から望遠鏡天体、最近の天文学的事件、これから起きたかもしれない天文事象など、面白そうな話題に「えー」という声で答えてくれる子供達や親御さんたちに元気付けられ、時間や労力の点できついこともありますが、なんとか乗り切っています。



東西南北の4面星図

また自分で星座や星を発見するのも楽しいことだろうと考えて、A1版の東西南北の4方向の星図を作り（これを4面星図と名付けてますが）、大きな行灯を作って外側に貼り付け、

行灯の内側からLEDライトで星図を照らして、参加者が懐中電灯なしで利用できるようしてあります。多くの子供達が自分の星座早見版を抱えて、この4面星図と見比べている姿は可愛くもあります。

このA1星図はキゴ山の協力で印刷していただき、行灯は自作しました。またこの星図は2週間ごとに作り替えています。星空の回転は意外に早く、星は2週間に1時間ずつ早く昇ってくることになるので、これくらいで作り直さないと、陳腐なものになってしまいますからです。

最近はキゴ山の金曜日以外にも、いくつかの場所での出張観望会を頼まれることが増えてきました。天体望遠鏡を操作して天体を見せる人、一般参加者の中に混じって解説する人、そして大型モニターかスクリーンで解説する私。金沢星の会一座は金沢市やその周辺を“興行”して回ってます。ご縁がありましたら、ぜひ、いらしてください。星々と共に歓迎です。



金沢星の会のXやYouTube
に天文現象等の情報をアップ
してあります。よかつたら見て
ください。

YouTube



X

■ 第54回石川自然観察会

- テーマ：～若狭へ7万年の時間を感じる1日バス旅行～
- 実施日：2025年12月14日(日)
- 行き先：福井県年縞博物館
- 定員：40名程度
(20人に満たない場合は中止することもあります)

INFORMATION

■ 企画展

- テーマ：「タネをまき、森をつくる生きものたち」 入場無料
- 期間：2025年11月1日(土)～2026年2月15日(日)

■ 特別展(写真展)

- テーマ：「巨樹の世界～石川県を中心として」 入場無料
- 期間：2026年3月14日(土)～5月17日(日)

発行／特定非営利活動法人石川県自然史センター 編集／いしかわ自然史編集委員会
〒920-1147 金沢市銚子町リ441番地 (石川県立自然史資料館内) TEL.076-229-3403・3450